●活動を通じた地域との連携　～学生と地域をつなぐ～

ボランティア・NPO活動センターは、地域のさまざまな団体や行政と連携し、学生の学びだけでなく地域貢献にも繋がる活動に取り組んでいます。ボランティアに関心はあるけれども参加経験が少ない学生たちへ向けては、地域と繋がる活動のきっかけとなるような様々な体験企画を学生スタッフが中心となって提供しています。また、学生スタッフ自身も地域の団体や行政からのさまざまな協力依頼に対し、ボランティア活動の裾野を広げるために積極的に関わっています。

企画名　タイトル	ナカマチ商店街夜市in丸屋町への協力
報告者名	笠間　ゆかり　（社会学部　地域福祉学科　２年次生）
日　　時	2009年７月25日（土）　18時00分～21時00分
場　　所	丸屋町商店街（大津市内）
イベント主催	丸屋町商店街振興組合
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）
参加人数	45人（うち、学生スタッフ20人）

■経緯・目的

大津市にある丸屋町商店街では、毎年夏に商店街の中で縁日や舞台イベントを開催しています。

ボランティア・NPO活動センター（瀬田）では丸屋町商店街の依頼を受け、この商店街の夜市運営を通じて、大津のまちづくりボランティアとして関わっています。夜市へ参加することによって、地域のまちづくりに貢献し、さらに地域の活性化につながっていることを学生に知ってもらいたいと思います。

■概　　要

○出店の運営

かき氷、綿菓子、金魚すくい、プラ板づくり、陶芸教室、サイコロゲーム、輪投げ

○学生オリジナル出店

玉子せんべい、フランクフルト、チョコバナナ、人間輪投げ

■参加者の声・得られた効果など

- 全参加者のうち一般学生が半数以上の25人で、学部を問わず多くの学生が参加してくれました。
- 「いろんな学生や地域の人々と交流できた」との感想がありました。
- 参加した一般学生の中には、初めてボランティア活動に参加した人も多かったのですが、そういった人たちも含めて活動を楽しんでもらえた上、センター発行のメールマガジンの登録もしてもらえるなど、センターの活動に興味を持ってもらえました。
- 商店街の方から「来てくれてありがとう」、「若者の力は頼りになる」と言って頂けました。
- 「衰退化している商店街を守りたいと思え、夜市への参加は商店街のまちづくりに貢献できたと思う」といった学生の声もありました。

■学んだこと・今後の課題

- 材料の分量、作り方や準備、片付けなどの段取りを、企画を担当した学生スタッフも

十分に把握できていなかったので、作り方の説明を紙に書くなど参加者全員が把握できるにするなど、事前の準備を万端にしておこうと思いました。

- 店担当をローテーションにすると慌ただしく、店の仕事を十分に行えなかったので、「店担当を全部固定にして、店をきちんと運営できる人を各店に２人以上配置する」などの方法を考えていきたいと思います。また休憩時間を十分に取れない人がいたので配慮を心がけたいです。
- 商店街は高齢化が進み、夜市の来場者も減少傾向にあり、商店街が衰退化しているという現状にあるので、お祭り以外でも商店街とのつながりを持ち、まちづくりに貢献していきたいです。

企画名　タイトル	Young☆Star　～今こそボランティア！飛び出せ若者！！～
報告者名	清水　麻未　（法学部　政治学科　３年次生）
日　　時	2009年11月25日～2009年12月14日
場　　所	京都市深草児童館
実施主体	龍谷大学ボランティア・NPO活動センター（深草）
参加人数	30人（学内30人　学外０人）

■経緯・目的

ボランティアについて学生の意見を聞いた際に、「きっかけがない」「初めて行くのは不安」などの声があり、ボランティアに興味はあるがその一歩を踏み出せない学生がいるのではないかと感じていました。そこで、初めてでも参加しやすいボランティアを体験してボランティアの楽しさ、やりがいを見つけてもらい、さらに活動を継続してもらいたいと考え、この企画を実施しました。

■概　　要

- 事前説明会：11月25日(水)12：30～13：00
- 体　験　日：11月30日(月)～12月12日(土)
  15：30～18：30
- 活 動 内 容：放課後に児童観に来る小学生（１～３年生）と遊ぶ。
- ふりかえり：12月16日(水)、12月17日(木)
  いずれも12：30～13：00

■参加者の声・得られた効果など

《参加者の感想》

- 大学に入ってからは同世代や社会人の人たちと接する機会がほとんどだったので、久しぶりに子ども達と遊べてとても新鮮だった。
- 時間が経つにつれて子ども達が心を開いてくれるのが分かって嬉しかった。
- 無邪気な子ども達に癒され、元気をもらえました。
- ボランティア前は子ども達と接する上での不安があったが、子ども達の方から引っ張ってくれて不安はなくなった。職員さんからの子どもの性格と配慮などが聞けたのが勉強になった。
- 日本語が上手に話せるか不安だったけど、子ども達とたくさん遊べて楽しかった。ただ子ども達が話す言葉で分からない言葉があったのが残念で、それが理解出来たらもっとたくさん話せたと思う。※留学生参加の声

今回参加してくれた学生達はボランティア経験がない人がほとんどだったので、今回の体験ボランティアは入り込みやすく、楽しめ

たようでした。そして、ただ楽しむだけでなく、子ども達と接する上で注意することや、工夫するべきことをそれぞれで考えているのが印象的でした。

活動終了後に実施したアンケートでは、今後もボランティアをやってみたいという答えを全員から頂くことができました。

■学んだこと・今後の課題

①参加者数や参加者の参加理由から、ボランティアに興味はあるが、なかなか参加できない学生が多いのではないかと感じました。センターをもっと活用してほしいのですが、参加者から「センターに入りにくい」「学生が活動していることは知らなかった」などの意見が聞かれました。
今後もセンターの認知度を上げ、学生が利用しやすい環境づくりをしていくことが課題です。そして、いかに利用する学生の立場になって考えられるかが重要だと思いました。

②ふりかえりでいくつかのボランティア紹介は行いましたが、参加後のモチベーションが上がっている状態でもっと具体的に次につなげるような内容を用意できていたら良かったと思います。

③参加した学生たちとの今後の関わり方です。

④当初ふりかえりはボランティア体験実施後の放課後に1日予定していましたが、予定が合わない学生がほとんどで急きょ別の日の昼休みという対応をしました。ふりかえりに限らずスケジュールに関して不都合がある学生への対応を考える必要がありました。

⑤早めの準備と役割分担です。一人一人のスケジュールの考慮や実施までの計画をメンバー内で共有しておくことが大切でした。

⑥今回は新型インフルエンザの影響で実施が危ぶまれ、子どもと参加者の両者を守るために、マスク着用と健康チェック（チェックシートの記入と検温)、手洗いの徹底を行いました。企画を立てる上であらゆる想定をして練っていくことも、突然のアクシデントに冷静に対応するために必要なことだと感じました。

企画名　タイトル	大津祭
報告者名	畠　　彩乃　（社会学部　臨床福祉学科　２年次生）
日　　時	宵宮2009年10月10日（土）　17時00分～ 21時30分 本祭2009年10月11日（日）　８時00分～ 18時30分
場　　所	大津市中央地区
イベント主催	NPO法人大津祭曳山連盟
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）
参加人数	本学学生36人（うち一般学生９人、学生スタッフ27人）

■経緯・目的

滋賀県大津市中央地区で毎年行われる伝統行事『大津祭』のボランティア活動を通じて、大津の文化・伝統を知るとともに、現在の中央地区が抱える少子高齢化問題や周辺地域の問題について、学生として何ができるのか実際のボランティア活動を通じて考えるきっかけとなることを目的としました。

■概　　要

①スタンプテーリングボランティア
②曳山綱引きボランティア(柳町の殺生石山)
③警備ボランティア
④大津祭PRグッズ配布ボランティア
⑤幕張り幕下ろしボランティア

■参加者の声・得られた効果

参加人数		良かった点	反省点
①	6名	スタンプラリーブースの手伝いを通して曳山を知ることができ、大津祭に興味がもてた。お客さんに大津の町を歩いてもらうきっかけを作ることができた。	各山で台紙の販売方法が違っていたり、ボランティアの配置人数が多かったりした。
②	14名	その場が一体となって盛り上がり、地域の人たちとの交流ができた。	当日欠員が出てしまい、その場合の対処方法などを事前にコアミーティングで考える必要がある。
③	12名	近くで曳山を見ることができた。怪我人を出すこともなく無事に終えることができ、目立たない所で支えている警備の大切さを知ることができた。	観客に注意や声かけを中心に行っていたので、あまり地域そのものを感じる事ができなかった。一般学生に勧めるのは難しいのではないか。
④	3名	祭り当日に開催された薬剤師全国集会でPRグッズを配布する際に、学生らしいアプローチができた。「行ってみる」と言ってもらえて大津祭のPRにつながった。	薬剤師全国集会の参加人数を把握できず、最初にまとめて配りすぎた。ただ渡すだけでなく、持ちやすいように袋の中に入れてあげるなど気遣いを意識して配布すべきだった。
⑤	7名	祭の朝に各町家で自分たちの幕を家の表に張り、祭に参加する人だけでなく地域全体で祭を盛り上げようとしているところが良かった。	幕を張ってから下ろすまでの時間がもったいないので、どのように活用すべきか考えるべき。事前に幕を張る家の人と顔合わせをしておくべきだった。

■学んだこと・今後の課題

去年に引き続き今年も大津祭に関わらせてもらいましたが、今年の大津祭は去年とはまた違うものとなりました。

今年は、去年も参加した綱引きボランティア・警備ボランティアの他にスタンプテーリングボランティア・大津祭PRグッズ配布ボランティア・幕張り幕下ろしボランティアと全部で5つのボランティアに参加しました。理事会や各ボランティアの打合せなどを私が中心となって参加していたのですが、他のコアスタッフにも積極的に参加してもらうべきでした。そうすることで、大津祭関係者の方々とコアスタッフとの連携がとれたのではないかと思いました。

一般学生へ向けて綱引きボランティアの募集を行いましたが、企画を動かすのが遅く広報に大きな影響をあたえてしまい、とても苦戦しました。コアスタッフふりかえり会では、「夏休み前から動き出すべき。」「チラシ配りだけでは限界があるので、企画係・三角柱・放送部とも連携をとるべきだった。」「チラシの内容も一般学生がイメージしやすいような詳しい説明を記入するべきだった。」との声がありました。そのような反省を活かして来年に繋げたいです。また、コアスタッフふりかえり会では去年とはまた違った視点での課題が出てきたので、来年からは一般学生にどのような形でボランティアに参加してもらうのかがこれからの課題となりました。

各ボランティアによって活動場所がバラバラだったので、上手く進んでいるのか不安でしたが、コアスタッフが中心となって皆を引っ張ってくれました。大津祭関係者の方々にも「すごく助かった。ありがとう。」と言っ

てもらう事ができ、無事今年の大津祭を終える事ができました。広報・ボランティア参加を手伝ってくれた学生スタッフ、応援にかけつけてくれた先輩方、色々とアドバイスをくださったコーディネーターさんなど、沢山の人の協力によってこの大津祭を成功させる事ができました。参加してくれた一般学生の方たちからも、「来年も絶対に参加する」と言っていただき、この大津祭ボランティアを通して他のボランティアにも参加するきかっけとなっていって欲しいと思いました。

企画名　タイトル	伏見区野宿者支援プロジェクト
報告者名	竹田　純子　（深草キャンパス　コーディネーター）
日　　程	2009年５月27・28・29日、６月24・25・26日、７月15・16・17日15・16日 ９月３日、10月７・８日、11月10・11・12日、12月９・10・11日 2010年１月20・21日、２月17・18日、３月11・12日
活動時間	15：30 ～ 19：00　※その時によって終了時間は多少前後する
活動場所	京都市伏見区の東高瀬川・西高瀬川・山科川周辺
参加者人数	のべ参加者数157人【学生55人、教員７人、センター関係者28人、JIPPO関係者64人、その他３人】※別途、参加を希望したが希望多数で参加出来なかった９人
実施主体	（特活）JIPPO、西本願寺、ボランティア・NPO活動センター

■経緯・目的

'08年度末にボランティア・NPO活動センターとも関係の深い（特活）JIPPOの専務理事であり、元龍大教授である中村尚司先生から、「東西高瀬川および山科川の橋の下などで生活している野宿者を支援する試みをJIPPOで行いたいので協力をして欲しい。」との依頼が寄せられました。実際に、JIPPOスタッフとセンタースタッフ、学生スタッフの有志で河川を歩き、調査してみたところ、支援が必要だと確信し、'09年春よりJIPPOと協力して伏見区野宿者支援プロジェクトを本格的に実施することになりました。

また、センターでは、積極的に一般学生にこの活動への参加を呼びかけています。この活動を通じて、参加学生に社会の問題や自分自身の偏見に気づき、自分自身の問題として考えてもらえるようになって欲しいと願っています。

■概　　要

月に１回ずつ３河川（東高瀬川・西高瀬川・山科川）の周辺に居住している野宿者に食料などの支援物資を持って訪問し、世間話をしながら健康状態や困っていることなどについて聞き取りを行い、必要に応じて情報提供や行政への働きかけを行いました。

また、毎回参加者の変更があるため、顔合わせと初参加の学生には簡単な活動に対する説明を行った後、支援物資の配布準備を行い、深草キャンパスを出発しました。活動終了後は毎回、JIPPOのスタッフを交えたふりかえりと、参加学生とコーディネーターでふりかえりを行い、活動を通じて得た気づきや疑問などを共有しながら、一緒に考えました。

訪問メンバーは、JIPPOスタッフ、本学学生、本学教員、センタースタッフでしたが、京都新聞社や本願寺新報の記者による同行取材もありました。

学生への呼びかけは、主に募集説明会や

HPを通して行いました。

★NPO法人JIPPOとの役割分担は以下の通り

JIPPO	ボランティア・NPO活動センター
• 訪問の際の車の手配及び運転 • 支援物資購入のための資金提供 • 入浴券の購入 • 行政機関との対応	• 支援物資の購入（会計報告も含む） • 支援物資の管理（入浴券他、支援物資全般の管理） • 支援物資の配布準備 • 広報活動（ボランティアの募集及び活動報告） • 勉強会の実施
報告書の作成やマスコミ対応などについては、両組織が共同で実施する。	

■参加者の声・得られた効果など

参加者からは、下記のような声が寄せられました。参加してみることによって、自分の中の差別や偏見に気づき、世の中の矛盾に気づいたのではないかと感じています。

- 今まで野宿者に偏見を持っていた。汚いのではないか、怖いのではないかと言うようなことを思っていたけれど、接してみたら優しかったり、マジメだったりとイメージが変わりました。
- この活動で体験したり、学んだことを、自分の身近な人に伝えたりして、社会のことに興味を持ってもらうようにしたい。
- 政治が肝心だと思うので、政治のことにも関心を持ち、選挙などにもしっかりと参加していきたい。
- なりたくて野宿者生活をしている人なんて居ないと改めて実感しました。
- たくさんの人がこのような活動に参加して、差別や偏見をなくして欲しい。

■コーディネーター所感

約１年間継続して３河川を訪問したので、野宿者の皆さんとの人間関係も少しずつ出来てきたように感じています。困ったことがあれば相談できるところが出来たと考えてくれている方や「そろそろ来てくれる頃やと思ってた。」と笑顔を見せてくれる方もいらっしゃいます。少しは皆さんの役に立てているのではないかと感じています。

皆さんとの出会いはとても貴重で、参加した学生たちも多くを学んでいます。特に公務員希望の学生などは、社会としてどう貧困問題について対応したらいいのかを、自分に出来ることは何なのかについて真剣に考えているようでした。

私たちが出来ることはほんのわずかで、社会状況を考えると暗澹たる気持ちになってしまいますが、この活動を通し、自分の中の差別や偏見に気づくことは、世の中を変えていくための大きな１歩ではないかと考えています。

企画名　タイトル	野宿者支援・勉強会
報告者名	竹田　純子　（深草キャンパス　コーディネーター）
日　　時	2009年12月16日（水）　17時30分～ 19時30分
場　　所	深草キャンパス　１号館104教室
実施主体	ボランティア・NPO活動センター
参加人数	20人（学内17人・学外３人）

■経緯・目的

龍谷大学ボランティア・NPO活動センターではNPO法人JIPPOと協力して、2009年５月より伏見区野宿者支援プロジェクトを実施していますが、まだまだ手探りの部分が多々あり、活動をより実効的にするには、この活動

に関わる人が野宿者問題についての理解を深め、活動を充実させていく必要があると考えています。また、この問題を一部の関心事にするのではなく、広く一般化するために、この問題について一人でも多くの人に触れてもらう必要があるとも考えています。これらのことを考慮し、勉強会を実施しました。

■概　　要

講師の本田　次男 氏（きょうと夜まわりの会代表）から以下の内容で講義していただいた。

1．現状に関する問題提起

- 誰もが無条件に安心して安全に生きていく場所が保障されているか？
  ＝野宿せざる得ない状況は憲法違反
- 人間として尊厳をもって生きる権利までもが受益者負担なのか？
- 社会的な必要に駆られて働く活動になぜか賃金が払われず、いわゆる「ボランティア」とされるが、適当な収入がなぜ社会から保障されないのか。　　等

2．京都市内の野宿者の現状について

- 野宿者の人権問題などの啓発活動は活発に行われているが、公園などの公共の場から締出している。
- 中央保護所の状況
- 下京区福祉事務所の取組み　　等

3．きょうと夜まわりの会の活動について

- 夜まわり、昼まわりについて
- なんでも相談会
- 希望の会への協力

講義の後、質疑応答の時間を設けました。

■参加者の声・得られた効果など

- 野宿者について知っているようで知ったかぶりをして本当は何も知らなかった。
- 国が守るべき憲法を野宿者の方に対して守られていないと言うことを改めて実感しました。
- 野宿者に関わってきて、たくさん心がつらくなったりしてきたが、今も関わらずにはいられない。何もしないよりは、野宿者について学んだり、それを人に伝えるだけでも大切なのだと最近強く思う。
- 公共の場所まで野宿禁止とういうなら、宇宙空間に行けということですかね」というのが、なんだかグサッときました。　　等

■コーディネーター所感

京都市の施策や、支援団体がどのようなことを考え、実行しているのかについての理解を深めることが出来ました。本田氏の言葉で「支援しすぎても、しなくてもダメ」「社会的な必要に駆られて働く活動にはなぜか賃金が得られず、“ボランティア”とされる」という言葉がとても重く響きました。私達は常に活動しながら、自分の活動を検証し「自己満足で支援し過ぎて当事者の力を奪うことになっていないか？」を問い続けると共に、“ボランティア”について問い続けなければならないと強く感じました。

企画名　タイトル	滋賀県立守山高等学校ボランティア体験事業　講演
報告者名	西島　有恒　（瀬田キャンパス　コーディネーター）
日　　時	2009年11月19日（木）　14時20分～14時50分
場　　所	滋賀県立守山高等学校　第１体育館
受 講 者	高校１年生240人

■経緯・目的

・学生などのボランティア活動体験などから、高校生にボランティア活動の知識や魅力などを伝えます。

■概　　要

・講演内容

①ボランティア・NPO活動センターの紹介

②ボランティアの概念説明

③学生の体験談や活動のきっかけなどを紹介

国内でのボランティア活動

海外スタディツアー（フィリピン）

・講演者

西島　有恒

（瀬田キャンパス　コーディネーター）

西野　碧さん

（経済学部国際経済学科　３年次生）

※センター主催の海外体験学習プログラム参加者

■参加者の声・得られた効果など

・講演終了後、聞いていた生徒の１人が「フィリピンに行くにはいくらぐらいかかりますか？」という質問があり、活動に興味をもってもらえたように思います。

■コーディネーター所感

ボランティア活動に興味をもってもらうときには、「ボランティア活動で感じたことなどの体験談を語る」ということは効果があることだと感じました。

またボランティア活動に興味をもってもらえるように、「きっかけ」、「感じたこと」をきちんと語れるようにしておくことの大切さを改めて感じました。

今後、一般学生にボランティアへ興味をもってもらえるように伝えるときのポイントとして学生スタッフに参考になるものだと思います。

企画名　タイトル	ゴミ拾いボランティア
報告者名	西島　有恒　（瀬田キャンパス　コーディネーター）
日　　時	2009年７月13日（月）　17時00分～19時00分
場　　所	文化ゾーン（瀬田キャンパス前）～瀬田駅～瀬田東支所までの道路沿い
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）
参加人数	一般学生３名　※当初参加予定人数10名

■経緯・目的

ボランティア・NPO活動センター（瀬田）への相談で、「環境」に興味のある学生が多く、環境分野の中でも「ゴミ拾い」を希望する学生が多かったため、本企画を下記の目的で実施することになりました。

・学生のボランティア活動へのきっかけとなり、その後のボランティア活動へつなげていきます。

・地域の美化貢献と参加者のマナー向上を目指します。

・地域という視点を学生に意識してもらい、地域との関係づくりをしていきたいと思います。

■概　　要

・活動内容

上記場所で火バサミを使用してゴミ拾い活動を実施しました。

・ゴミの収集方法

大津市の処理方法に準じてゴミを回収、分別し、また処理に関して瀬田東地区の自治

会にご協力いただき、収集日に収集場所へ置かせていただきました。

※実施日の前日に、学生スタッフが新型インフルエンザに感染したため、当該学生スタッフと接触のあった学生７名については活動自粛となりました。

■参加者の声・得られた効果など

- 途中まで順調だったが、雨が降ってきて最後までできずに残念でした。
- 実際にボランティア活動ができてよかったです。
- この活動に参加した学生が、他のボランティア活動に参加することになり、この企画が実際に活動のきっかけになったと思います。

■学んだこと・今後の課題

- 今回、新型インフルエンザの影響で人数が減り、また天候の悪化により少し物足りない活動となってしまいました。
- 時期の選定や、学生の「ゴミ拾い」の要望をもっと吟味していく必要があると感じました。
- ゴミ拾いの活動では、ゴミ処理を地域の方のご協力により無事処理できた一方で、地域との接点が一部となってしまい、学生に地域を知ってもらうという面が非常に少なかったと思います。
- もっと地域に密着した形で地域の活動に関わっていく必要があると思います。

企画名　タイトル	くさつ子どもフェスタ2010
報告者名	太田　康介　（社会学部　社会学科　２年次生）
日　　時	2010年１月17日（日）　９時00分～15時00分
場　　所	草津市野村運動公園
実施主体	「くさつ子どもフェスタ2010」実行委員会
協　　力	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）
参加人数	18人（一般学生８人、学生スタッフ10人）

■経緯・目的

毎年実施されているくさつ子どもフェスタですが、昨年度までは学生スタッフのみで参加をしていました。

今年度は一般学生にも参加してもらい、ボランティア活動のきっかけ、ボランティアに対する抵抗がなくなればいいと考えました。また、大学内では関わることの少ない地域の人々と交流する場にもなればいいと思い企画を立てました。

■概　　要

- 風船アーチ作り
- 手作りおもちゃのコーナーの補助
  キャンドルづくり、ペットボトル空気砲づくり
- 着ぐるみ（たび丸くん）を着てのPR活動

・その他（事前準備、後片付けなど）

■参加者の声・得られた効果など

・何をすればいいのかきっちりと伝えてもらったので、動きやすくやりやすかったです。
・子どもたちと触れ合えて、一緒に工作ができて楽しかったです。
・初めて子どもと触れ合うボランティアをしたが、いろんな人と触れ合い楽しむことができました。
・くさつ子どもフェスタそのものが非常に活気があったので、こちらとしても楽しく参加させていただけました。
・知らない人が多かったのですが、なじみやすく声もかけてくれたので、楽しく活動することができました。
・暇な時間が多かったです。
・準備物は前日に準備しておいた方がいいと思いました。

地域の人々と交流する場にするという企画の目的は達成できたと思います。何かボランティア活動を取り組みたいと思い参加している人もいたので、何人かの活動のきっかけになったと思います。

■学んだこと・今後の課題

振り返りの中で一般学生への対応が一番取り上げられました。当日、一部の一般学生が何もすることのない時間ができてしまい「暇だった」という声もあがっていたことから、役割分担をきっちりすることが課題であると思いました。

参加者の声で「知らない人が多かった」という声があったこと、振り返りで「ボランティア参加者と学生スタッフの自己紹介がほしかった」という意見から、学生スタッフと一般学生とのコミュニケーションを積極的に行う必要があると感じました。

参加してくれた一般学生の半分以上はボランティアによく参加している人だったので、次年度はボランティアに参加したことがない人などが多く参加できるように広報の方法などを考えていきたいです。

10人という目標人数を達成できなかったことなどを次年度の企画に活かしたいです。